

無量寿

2017
秋

CONTENTS

[P2] 報恩講講師紹介 [P3] 他寺報恩講案内/家庭報恩講の勧め [P4-7] 永代経法話録 [P8] 活動報告「仏の子の集い」他

【発行】雲夢山寿命寺

大津市雄琴 3-19-36 TEL/FAX 077-572-5125 <http://jumyouji.net/>

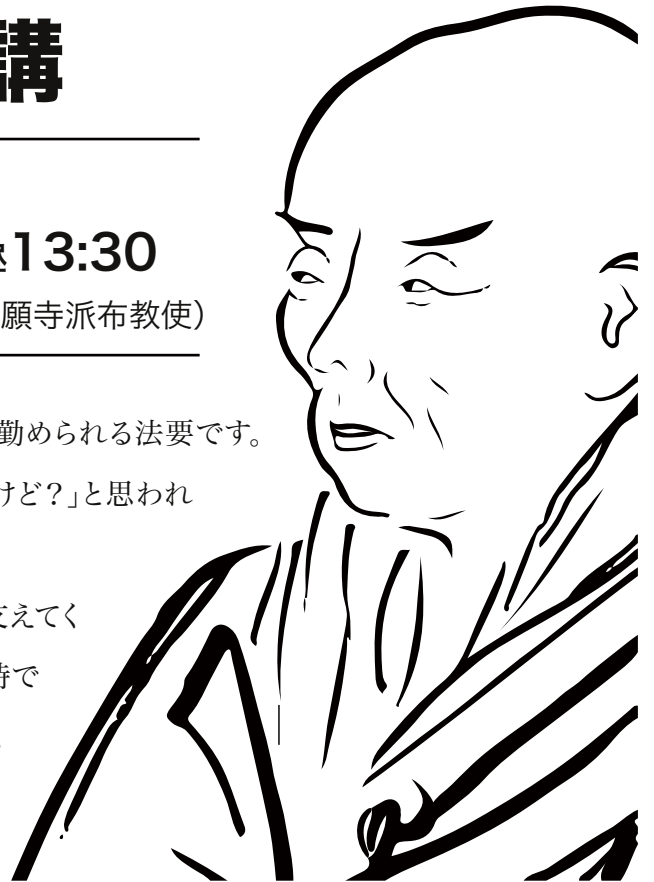
平成
29年

親鸞聖人報恩講

10/28(土) 昼14:00 夜19:00

10/29(日) 早朝7:00 朝10:00 昼13:30

【講師】高務哲量 師(福井・千福寺住職/本願寺派布教使)



報恩講は宗祖親鸞聖人の御恩への感謝の気持ちから勤められる法要です。でもこう聞くと「別に親鸞聖人から御恩なんて受けてないけど?」と思われる方がいるかもしれません。

私たちが恩義を覚えるのは、その人や物が今の自分を支えてくれている、助けてくれている、役に立っていると実感できる時です。親鸞聖人の御恩とは偏に南無阿弥陀仏のみ教を私たちに示し、勧めてくださったことに尽きますから、聖人に別段恩義を感じないということはつまり、南無阿弥陀仏なんて自分の毎日には関係ないと思われているということでしょう。

確かに念仏してもお腹が一杯になったりお金が貯まることはありませんし、病気や災いから逃れられる訳でもありません。効果が目に見えないものや即効性のないものは無用と切り捨てられる現代社会で、お念仏もそういう類のものと思われているのかもしれませんが。

でも、後で振り返って気づく恩ってないですか?例えば若い頃は反発しか覚えなかった親の厳しい言葉が、その時の親と同じような歳立場になってみて、厳しき込められていた願いに気づき、大切な思い出に変わるといふような。

南無阿弥陀仏もこれに似ています。親鸞聖人は阿弥陀如来は私に関係ないと思っていても、ずっと休むことなく私に寄り添いはたらきかけ続けてくださっていると仰います。幸運にもそのはたらきに気づくことができたなら、私たちはその時初めてこれまでのご恩を感じることができるのです。

報恩講の「報」の字には知らせるという意味もあります。恩に報いるにはまず恩を知ることから。聖人がお勧めくださった南無阿弥陀仏とは一体何なのか、私の毎日にどう関係するのか。そのはたらきを改めて聞かせていただくことこそがこの法要の意味です。どうか一人でも多くの方に御恩を感じてもらえますよう、有縁の方々お誘い合わせの上、お参りください。

「ともにこれ凡夫(ただひと)」



高務哲量
(たかつかさてつりょう)
昭和27年鹿児島県生まれ。慶応義塾大学卒業後、大阪高槻市の行信教校(ぎょうしんきょうこう)で浄土真宗を学ぶ。昭和55年福井千福寺に入寺。現在千福寺住職・本願寺派布教使。

幻の完全試合

二〇一〇年六月、大リーグ・デトロイトタイガースのアルマンド・ガララーガ投手は、九回ツーアウトまでパーフェクトピッチングを続けていました。二十七人目の打者が打った一、二塁間へのゴロを一塁手が捕球し、ベースカバーに入ったガララーガに送球しました。塁審はセーフのジャッジを下し、それに対してタイガースの選手たちは大いに抗議し球場全体も騒然となりましたが、判定は覆りません。

試合終了後、ビデオ再生を見たこの塁審は明らかに自分のミスジャッジであると認め、すぐさまガララーガ投手に詫言いました。審判のミスジャッジによって大リーグ史上二十一番目のパーフェクトゲーム達成投手になれなかったのですから、ガララー

ガ投手の無念さは想像に余りあるものがあります。

ところが彼は、「たぶん僕よりも彼のほうがつらい思いをしているだろう」と反対に気遣い、心から詫言するの審判を「完全な人間なんていないのだから」と言つて、寛容な態度で許したのです。

唐突なようですが、このニュースを聞いて私は、聖徳太子の「憲法十七条」の第十条の言葉を思い出しました。



「われかならず聖(ひじり)なるにあらず、かれかならず愚かなるにあらず。ともにこれ凡夫(ただひと)なるのみ」(註釈版聖典・二四三六頁)

日本に仏教を受け入れて、仏教精神にもとづく社会のあり方を目指されたのが聖徳太子でした。もちろんガララーガ投手が聖徳太子や「憲法十七条」を知っていたはずはありませんし、彼の示した態度を仏教精神に裏付けられたものというつもりもありません。ただ世の東西を問わず、人は

自分の非はなかなか素直に認めようとせず、逆に自分への不利益に対しては怒りや報復の態度をあらわにしがちです。そうであるからこそ、相手の過ちをせめないという寛容のころは、人類の精神史において培われてきた最も尊いもののひとつであると思

います。

自分のことは棚上げに

普段の生活の中で、人の善し悪しを口にして他者を裁いているのが、偽らざる私の姿です。

私たちが人を裁き批判する時には、どのような位置に立っているでしょう。自分の不完全さを棚上げして、あるいは「自分も立派なことは言えないけれど」と抜け道を作つておいて、他者の批判をしているのではないのでしょうか。

『歎異抄』後序(ごじよ)のお言葉が思い起こされます。

「本當にわたしどもは、如来のご恩がどれほど尊いかを問うこともなく、いつもお互いが善いか悪いか、そればかりをいいあつております。親

●参り合い寺院報恩講案内●

この時期、近隣の寺院でも順番に報恩講が勤まります。寿命寺からは婦人会の皆さんがお参りいただいておりますが、もちろんそれ以外の方でも自由にお参りできます。

同じ報恩講でも各寺院独自の文化が垣間見えて面白いですし、何よりいろんな布教使さんのお話が聞けますので、是非他寺の報恩講にも足をお運びください。

- 本福寺(本堅田) 9/16,17,18 植田豊 師
- 慶専寺(和邇) 9/30,10/1 九條孝義 師
- 龍光寺(平尾)10/6,7,8 九條孝義 師
- 圓成寺(衣川) 10/13,14,15 和治教文 師
- 専念寺(上仰木) 10/19,20,21 杉本宗俊 師
- ★専念寺住職継職法要 10/21午後 佐々木義英 師
- ★正源寺宗祖750回大遠忌法要 11/4 貴島信行 師
- 正源寺(真野浜) 11/5,6 冬野正晃 師

●家庭報恩講のすすめ●

1頁にも書いたとおり、報恩講は親鸞聖人が私たちにお念仏を勧めてくださった御恩への感謝から勤める法要です。

でもお念仏が今私の口から溢れるようになったのは聖人一人だけのおかげではありません。大切なみ教を家族や子孫にも伝えたいと願われたご先祖様がなければ、その縁は途切れていたかもしれないのです。

そのように考えれば、報恩の対象は各ご家庭のご先祖様や有縁の方々まで広げることができます。だからこそ古くから広くご門徒の家庭でも報恩講が大切に勤められてきたのです。

最近では多くの人にとっては縁もゆかりもないはずの外国の様々な宗教行事が、コマースに煽られる形で家庭の中で行われるようになってきましたが、ご先祖様が大切に残してくださった宗教の最も大切な行事が見向きもされないのだとしたら、なんとも悲しいことです。

どうか、各ご家庭でも報恩講をお勤めしましょう。時期は問いません。お盆やお正月にしてもいいですし、大切な方の祥月命日にお勤めするのもいいでしょう。兎にも角にも、まずは住職までご相談ください。

なま-も-み-だ-は-ん-ぶ-う-



鸞聖人は、『何が善であり何が悪であるのか、そのどちらもわたしはまったく知らない。なぜなら、如来がそのおこころで善とお思いになるほどに善を知り尽したのであれば、善を知ったといえるであろうし、また如来が悪とお思いになるほどに悪を知り尽したのであれば、悪を知ったといえるからである。しかしながら、わたしどもはあらゆる煩惱をそなえた凡夫(ぼんぶ)であり、この世は燃えさかる家

夫であり、真実なる如来さまから哀のようにはたまたまに移り変わる世界であつて、すべてはむなくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中であつて、ただ念仏だけが真実なのである』と仰せになりました(現代語版『歎異抄』五〇頁)

まことなるものに聞き触れるとき、わが身のまことならざる姿が知らされます。そこから、ともにこれ凡

しまれているものどうしでしたね、という共感と寛容のところが、私のうちにはひらかれていくのではないでしょうか。こうした態度は、決して綺麗ごとでも生ぬるいことでもなく、人間の持ち前である自己中心性と対立する厳しいものであるはず。お念仏の教えは、一つ間違えば根から腐ら

に私の栄養と転じ、泥に汚されることなく清浄(しようじょう)な花を咲かせ、汚泥をも麗しく荘厳(しょうごん)していく力となつてくださいます。涼しげに咲く白蓮華の根は、地中で汚泥と必死に闘い続けているに違いありません。そして共感と寛容のこころは、その底にこうした厳しさを内包するものであればこそ尊いものといえるのでしよう。

永代経法要法話録

「闇を破る仏の名告り」

瓜生 崇 師(東近江市 真宗大谷派 玄照寺住職)



五月十四日、恒例の永代経が勤まりました。ご講師は瓜生崇師。生死の問題から目を逸らす私を揺さぶり起こすかのような、気迫に溢れるご法話でした。要約をお届けしますので、当日の熱量を少しでも感じていただければ幸いです。

永代経法要の願い

こんにちは。東近江市から来た瓜生と申します。以前京都に勤めていて、残業で終電になった時、間違えて湖西線に乗ってしまうことが何度ありました。そういう時は大抵疲れて寝てしまっていて、ハッと目が覚めるのが雄琴か堅田なんです。それで慌てて降りて、連れ合いに「迎えに来て」って電話して怒られる。ここ雄琴にはそういう苦しい出があります。

さて今日は永代経ですが、ご先祖様の永代供養の法要だと思ってる方が多いのではないですか？間違いいではないですが、もつと大きな願いがあるのです。それはお参りの人に仏法を聞いて欲しいということとです。だから永代「供養」ではなくて「経」と言う。お経に説かれた南無阿弥陀仏の教えが皆さんに代々伝わってほしい。それが永代経の願いです。

でもそれは永代経だけじゃない。報恩講も法事も月参りもみんな南無阿弥陀仏に出会って欲しいということなのです。お葬式もそうです。お葬式は亡くなった人の為に経を唱えるものと思ってる方もあるかもしれない。でも違うのです。

お葬式のメッセージ

浄土真宗のお葬式は西も東も必ず「帰三宝偈(きさんぽうげ)」というお経で始まります。お経の出だしは「道俗時衆等(どうぞくじしゅうとう)」です。道はお坊さん、俗は一般人、時衆は今ここにいらっしゃる人々。だからお坊さんもそうでない人も、ここに居る全ての人ということ。皆さん！今から大切なお話をしますから一緒にしっかりと聞きましょう！という呼びかけからお葬式は始まるのです。

続けて「各発無上心(かくほつむじょう

しん)」。皆さんそれぞれ尊い心を起こして今まで一生懸命人生を歩んでこられたね、という語りかけです。皆さんも人生を振り返ってどうですか。苦しいこと、辛いこと、悲しいこと、いろんなことがあったけど、少しでもよく生きたいと思って懸命に生きてきたんじゃないですか？これが無上心ということ。です。

人生は狂人の主催するオリンピック

ところで作家の芥川龍之介は人生とは



「狂人の主催するオリンピック」だと言っています。オリンピックとはつまり競争ということ。しょう。私は第二次ベビーブームの頃に生まれました。受験戦争が一番厳しかった頃で、今では考えられない話ですが学校の廊下に学年全員の試験の順位が張り出されていました。とにかく勉強して一つでも順位を上げようと頑張りました。みんながそうやっていい大学、いい会社を目指して、人より前に上にと必死で走ってきました。だから人生がオリンピックだというのは頷けます。

でも「狂人の主催する」とは何でしょ

う？私は二つ理由があると思います。一つは自らの意思でスタートラインに立ったのではないこと。もう一つはゴールがいつどこか分からないことです。私たちは場所や親を選んで生まれることはできません。自分では知らない間に生まれて、気づいたらもう競争の只中にいる。そして死ぬこともいつどこでどんな形で訪れるか分からない。人生というレースを懸命に走っているけど、それが何のためにどこに向かっているか、終わるか、見当もつかないまま走っている。これを芥川は狂っていると言うのです。

以前新聞に小学生からの人生相談が載っていました。「人はどうせ死んでいかなくてもならないのに、なぜ一生懸命生きなくてはいらないのですか？」と。これに対してどこかの大企業の社長が回答していました。「そんな悩みを持つのは暇だからだ。中学、高校、大学、就職。その時々勉強や仕事、家族、目の前のことに打ち込めば忘れる。だからそんな悩みは時間のムダだ。一生懸命生きなさい」。小学生の真剣な問いに対して酷い回答だなと思いました。でも私自身、三十一の時に仕事もお金も友人も失って「何のために生きてるんだらう、もう死んでしまおうか」と思い詰めたことがありました。でもその時は悩んでいる暇があったら立て直そうと思ひ直して、

懸命に働いて何とか命を繋いできたんです。だから人は「なぜ生きるのか、なぜ死んでいくのか」と考えていたら生きていけないということ実は実感としてあります。そんなことより目の前のことに懸命取り組んで生きなさいという社長さんの言葉にも、確かにみんなそうやって生きています。など頷かざるを得ないところがあります。

生死を厭うこと甚だ難し

「帰三宝偈」の続きには「生死甚難念(しょうじじんなんねん)」、生死を厭うこと甚だ難し、とあります。正にさっきの小学生のように、なぜ死んでいかなければならないのに生きるのか、そういう人生の根本の問題と向き合うことはとても難しいという意味です。皆さんがこれまで人生を一生懸命生きてきたことは知っています。でもそれは自分が死んでいかねばならないという事実から目を背けて、それで一生懸命やってきたと言っているんじゃないですか?と問われるのです。お葬式で。大切な人のご遺体を前にして。

それはつまり「皆さん仏法を聞いてこなかったんじゃないですか?」という問です。熊本のお寺では赤ちゃんの初参式に「お経いただき」という儀式をやるそうです。なんでもお経の本で赤ちゃんの頭をガツンと

どつくそうです。当然赤ちゃんは泣きまです。なぜこんなことをするのかと言うと「お前は生まれたということは死ぬんだぞ」と教えているのです。お母さんは喜び一杯でこの子が死ぬなんてこれっぽっちも思っていないが、いつか必ず死ぬ。その本当のことを初めに突きつけるのが仏法なのです。

今、日本人の死因の四割は癌だそうです。でも実は癌が原因で死ぬ人は一人もいません。蓮如上人の時代には疫病で亡くなる人が多かったのですが、蓮如上人は疫病で死ぬ人は一人もいないと言いました。またからです。

お経には人は生まれられた時既に後ろに虎を飼っていることあります。その虎は片時も私から離れることなくついてきて、最後は私を食い殺すのです。私は今四十三歳であと四十年くらいは生きたいと思ってる。でも帰りに事故で死ぬかもしれない。虎がいつ襲ってくるかは分からないのです。ただ事故で死のうと癌や病気で死のうとそれらは死の縁でしかない。縁は人それぞれ違う。でも死の因はみんな同じ。



生まれたからです。

生まれたということは死ぬということ。当たり前のことだし頭では理解できる。でもそんなこと四六時中考えていたら私たちもとても生きていけないですよ。だから考えないよう目の前のことに一生懸命励む。目の前のものを掴んで「これが私の人生だ、私の願いだ」と思って生きる。健康、家庭の平穩、仕事の成功。その時々いろいろな願いを持つ。でもそれは次々に消えていく願いです。そして最後は自分の健康を保つ、命を永らえることが願いとして残るでしょう。でも結局死んでそれさえも潰れてしまうのです。

独り生まれ独り死し...

死ぬということは何も残らない、持っていないということ。私の父は肝臓癌になって亡くなりました。見舞いに行くといつもシチズンの腕時計をしているのですが、体が浮腫むのでバンドが腕に食い込む。痛そうだから私たちはそれを外してあげるのですが、次に行くときまたしている。何度外してもまた着ける。あれはなぜだっただのだろうとずっと思っていました。今ちよつと分かるのです。実は最近自分も大腸の手術をしたのですが、使い捨てのパンツだけ履かされて他に何も持たずに手術

台上上がるのです。ああ、人間が死ぬ時つてこういう感じだと思いました。たつた独り、素っ裸で、何も持たずに死んでいなくては何かな。父はそれが怖くて、せめて腕時計だけでも身に付けていたかったんだなと感じたのです。

仏教つて何かと言つたら生死の問題の解決です。決して心を安らかにするためとか病気にならないために聞くものじゃない。仏説無量寿経には「独生独死独去独来」とあります。独りで生まれてきて独りで死んでいく。この厳しい現実に向き合わせるのが仏法です。私たちはそこから目を背けて時々いろいろな願いをもつて生きていくけど、そんな願いはこの現実の前に消え失せていく。でもそういう私の時々願いを超えた本当の願いがあるということ。聞かせてもらおうのも仏法です。そしてその本当の願いというのが南無阿弥陀仏のお念仏なのです。

ではその南無阿弥陀仏とは何か、本当の願いとは何か。続きは夜の座でお話します。どうぞ夜もお参りください。

法鏡く真実の姿と向き合う

皆さんこんばんは。控室で住職さんには夜はお参りが減りましたと聞きました。が、全然減っていないじゃないですか。ようこ

そお参りになりました。

さてお昼座では私たちは独りで生まれ
てきて独りで死んでいく。この厳しい現実
に向き合わせるのが仏法だと話しまし
た。本当の私の姿と向き合うということ
です。だから仏法のことを「法鏡(ほうきょ
う)」と言います。

この間うちの娘が顔にご飯粒つけたま
ま学校に出かけようとするので「おい！
ちよつと鏡見てこい！」と言いました。す
ぐ洗面所に走って行きましたが戻ってき
たらまだ米粒がついている。それで「鏡ちゃ
んとみたんか？」と聞いたら「見た！四角
かった！」って走っていきました。

これは笑い話ですが、仏法を聞く法鏡
を見るということでも同じようなことを
している方があるのです。仏法聞いて知識
が深まったとか、利口になったとか為に
なったとか。こう仰る方は鏡を見て四角い
鏡だったと言っているようなものです。

仏法を聞くとは私の本当の姿と向き
合うということです。独りで生まれ、誰と
も繋がらず、誰のことも理解せず、誰にも
理解されず、ただ独りで死んでいく。でも
私たちはこのことを聞かされると全力で
抵抗するのです。私達の生きるという営み
自体がこの事実への抵抗と言ってもいい。
私たちは独りで生まれ独りで死んでいか

なくてはならない存在でありながら、独り
では生きていけない。だから「俺は独り
じゃない！」と叫んで他の人に認められたい、
関わりたいと願って生きるのです。

その抵抗は生まれた時から始まってい
ます。親に育ててもらわなければ生きてい
けないからかまつてと泣く。弟か妹が生ま
れようものなら母親を取られまいとして
下の子を攻撃したりもする。それが成長
してもずっと続いていきます。いい学校や
会社に入ろうとするのも、地位や名誉を
欲するのも、偏に人によく見られたい、認
められたいからです。そしたら友だちがた
くさんできて、人に必要とされる。人に必
要とされたら独りじゃないって思える。だ
からみんなに認めてもらおう、理解しても
らおうと腐心するのです。



喧嘩するのもそうで
しょう。自分のことを分
かってもらえないから俺
て怒るんです。逆にお世
辞やおべんちやら言うの

も同じです。嫌われて独りになるのが嫌だ
から思ってもいないことを言っ、本当に
思っていることは言わない。でも分かり合
うために嘘ついていたら、分かり合えるわ
けないですよ。

分かり合えない私達

実際私たちはお互い分かり合っている
つもりで全然分かり合えていません。私は
子供の頃、親だけは自分の事を理解して
くれていると思っていました。でもそれは
自分が親になって幻想だったと気づぎま
した。だって今自分の子供が何を考えてい
るのか、さっぱり分からないですもの。

夫婦でもそう。結婚した時、男と女つて
こんなに考え方が違うのかと驚きました
が、これから一緒に時間を掛けてゆつくり
分かり合っていけばいいと思っ、いまし
た。あれから十二年。分かり合うどころか
ますます分からなくなっています(笑)。

私たちは独り裸で生まれてくる。でも
それじゃ生きられないから、周りにいろん
なものをくつつけていく。友だち、勉強、仕
事、家庭、名誉、健康…どうだ、俺はこん
なにいろんなものを持っているぞ。独りな
んかじゃないぞとアピールして生きる。で
も、そうやって身につけているものが私自
身になることはない。それはいつか剥がれ
落ちて消えていくものなのです。

けれども私たちはそれを自分自身だと
錯覚しています。自己紹介をすれば分か
ります。私は瓜生といいます。四十三歳で
す。東近江市から来ました。妻一人、娘三
人、猫一匹と暮らしています。昔は技術者

として働いていました。こういう人間です、
こういう人格です、こういう人生です。「こ
ういう」というのは全部、後から周りに
くつつけてきたものでしょう？

他人を理解するのもやはり周りについ
ているものを見ていただけです。例えば御
住職の杉生さんとは知り合っ、五年位に
なりますが、私が杉生さんについて知っ
ていると思っ、全部周りで。私
たちは周りの部分を触れ合っ、お互い
分かつたふりをしてるのです。真ん中の
部分が触れ合うことはない。そこは分か
らないのです、お互い。そして自分自身でも。

本当の私「闇」

この真中の部分を親鸞聖人は「闇」だと
仰る。闇とは暗いということ。パソコン
については「暗い」と言えばパソコンのこと
を知らない、分からないということ。で
しょ？だから本当の私のことが分からな
いってことです。それなのに私たちは一生懸
命走っているのです。真つ暗な闇の中を。
暗いなら止まればいいのだけど、それも許
されない。うちの坊守がこないだ四十歳に
なりましたけど、ずつと言っ、
「私が四十歳なんてあり得ない、ずつと三
十代のままでいたい！」って。それは無理で
しょ？止まれないのです。

じゃあどうやったら闇が晴れるのか。どうやったら本当の私に会えるのか。親鸞聖人はご和讃にこう示されます。

「無碍光如来の名号と かの光明智相とは 無明長夜の闇を破し 衆生の志願をみてたまふ」

無碍光如来とは阿弥陀如来のことです。その名号とは言うまでもなく先程から皆さんが称えておられる南無阿弥陀仏のことですね。その名号が私たちの闇を破ると言われるのです。

名号は私を呼ぶ仏の名告り

名という字は「夕」と「口」に分けられます。夕方暗くなって道で人に会っても顔が見えなくて誰か分からない。そんな時は「〇〇さん?」と名前を呼んで確認しますよね。だから名という字には暗がりや誰か確認する、知らせるという意味があります。そして号。号令は大きな声でかけます。さらに旧字だと號と書きます。虎はどう鳴きますか?ネコ科だから「ニャオ♡」ですか?違いますよね、「ガオウ!」って吠えるんですよ。居眠りしてた方、目覚めません? (笑)

つまり名号とは大声で名前を呼んで私達を夢から目覚めさせるものです。夢って起きていた時は考えられないような状況、

例えば空を飛んでいたとしても、それを疑問にも思わずとにかく一生懸命飛ぶでしょう?不思議ですよ。でも考えてみれば私達の人生も同じようなものじゃないですか?だって意味は分からないけど一生懸命生きています。夢のようなものです。だからその夢から目を覚ませるって仏さまが大きな声で呼ぶのです。

どれくらい大きな声かという仏説無量寿経には「正覚の大音、響き十方に流る」とあります。宇宙の至る所に南無阿弥陀仏が充満していると言うのです。でもそれだけではまだ私は目覚めない。私には関係ないと思っているのです。



選挙カーが候補者の名前を連呼しながら近所を走っている。うるさいなと思うくらいで特段気にも留めないでしょう。でも家の前で停まって玄関開けて大音量で「〇〇でございませう!」って言われたら「ハイッ!」ってなるでしょ? 同じように迷い続けてきたこの私を目覚めさせるには、私の所まで来て私そのものを呼ばなければならぬのです。

名告りがそのまま仏さま

名号はただの大きい声じゃなくて、私を

呼び覚ます仏さまの名告りなのです。さらに大切なはその名告りの言葉がそのまま仏さまだということ。仏さまと言葉が別にあるんじゃないんです。

(内陣を示しながら)ここに「本尊がおりますが、これは仏さまそのものじゃない。これは「仏像」です。その証拠に裏側を見たら「方便法身尊形」って書いています。「この像は皆様に見えるようにこういう形をしています。仏さまそのものではありません」という注意書きです。私達の仏さまは南無阿弥陀仏の名号です。こう聞くと今度「じゃあ南無阿弥陀仏って書いた紙が「本尊なんですか?」なんて言う人がいます。が、違います。私の元まで至り届き、私の口から出る南無阿弥陀仏が仏さまそのものだと云うのです。

曾我量深

(そが りょうじん)という明治から昭和に活躍したお東のお坊さんは「如来我となりて我を救いたもう」と言っています。仏さまが私となつて本当の私を呼ぶと言っているのです。仏が私になると言っても私が仏になるのなくて、私の言葉、つまり私の口から溢れる南無阿弥陀仏となつて、私を呼ぶのです。



本当の願いに会う

南無阿弥陀仏は仏さまの名告りであると同時に闇そのものである私を呼ぶ声です。南無阿弥陀仏に出会うとは本当の私に会うということ。独り生まれ独りに会うという事です。「違ふ、そんなはずはない」と抵抗し、掴んでは無く、また掴んでは無く、すれすれの中です。いつまでたつても本当の独りの私に会えなかつた私。それが「お前は独りじゃないよ」という阿弥陀如来の呼び声を聞いて、初めて本当の独りの私に会えるのです。

「無明長夜の闇を破し 衆生の志願をみてたまふ」。志願とは本当の願いです。なぜ生きているのか、何を願って生きているかも分からず迷い続けてきた私、それを見抜かれた仏さまが南無阿弥陀仏の言葉となつて、私の想いを貫く。貫かれて初めて私の闇が破られるのです。

貫くものにあつたら私はどのように生きてもどのように死んでもいいのです。より正しく生きるのが救いじゃない。安心して死んでいくのが救いでもない。お前を絶対に諦めないよというはたらきにあつたというその事実の中に生きる。それが南無阿弥陀仏の、浄土真宗の救いなのです。

「仏の子の集い」が開催されました

8月1日、滋賀組寺族青年会による「仏の子の集い」が寿命寺で開催されました。この行事は毎年この日に組内寺院持ち回りで開催されています。当日は組内各寺院の引率で約40人の子どもが本堂に集まりました。

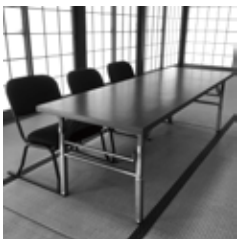


最初に「らいはいのうた」を唱えて法話を聞いた後、レクリエーションとしてみんなでクラフト飛行機作りに励みました。完成したら近くの公園に移動して飛距離を競い合い、最後はまた本堂に戻り、宝探しゲームを楽しんだ後、解散となりました。

実は今回は私(住職)の告知、呼びかけが足らず、寿命寺からの子どもの参加がありませんでした。子どもたちとご縁を結ぶ貴重な機会をふいにしてしまったこと、大変反省しております。それでも大勢の子どもが本堂に集うさまは賑やかでありがたいものでした。来年は雄琴の子どもたちも参加できるように声がけさせてもらいたいと思います。

尚、前日準備と当日の運営に婦人会の役員・理事を中心とした方々にご苦勞をいただきました。暑い中、本当にありがとうございました。

本堂の机の足が伸びました!



この度、本堂の折りたたみ机の脚に伸長加工が施され、全ての机が椅子に座って使える高さになりました。

作業は総代の古川重雄さんご夫婦のご奉仕によるもので、溶接の上に補色とテーピングを施すこだわり様。

お陰様で今年の報恩講のお齋は全員が椅子に座って頂くことができます。また研修会や会議も快適になることでしょう。本当にありがとうございました。

またこれに合わせて、同じく総代の伊藤庄蔵さんより新たな座椅子も寄贈頂きました。併せて御礼申し上げます。

墓地管理の検討を進めています

近年、社会環境の変化などを背景に、墓地の管理運営において、これまでにはなかった様々な課題が顕在化してきました。

そのため今年度より住職と総代で組織される墓地管理委員会を月一回のペースで開催し、諸々の協議を行っています。

最重要案件は「墓地管理規程」の見直しで、これについては来年春の門徒総会で皆さんにもお諮りしますが、喫緊の課題として皆さんに墓の継承予定者の届出をお願いすることになりました。

追って文章にてお願い申し上げますので、ご協力のほどよろしくお願ひいたします。



編集後記

寺報「無量寿」、今号はこれまでにないボリュームでお届けしました。中でも五月の永代経の瓜生師の法話録に多くの紙面を割きましたが、いかがだったでしょうか。

浄土真宗のお寺は法話を聞くために存在していると言っても過言ではありません。そこから報恩講の二回しか布教使さんのお話を聞いて頂く機会がなく、誠に寂しいことです。でも住職が兼職していることもあり、直ちに法座を増やすのは困難です。

そこでせめてもの策として、これまで生で聞いたらそれっきりになっていた法話を、もう一度味わってもらおうとご講師の許可を得てテキストにまとめさせてもらいました。今回の報恩講のご法話も同じようにお届けしたいと思ひます。

とは言え、やはり法話は生に限ります。永代経にお越しになれなかった方も、今回の報恩講にはぜひ、足をお運びください。